

3月11日に発生し、東北と北関東を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災。その影響はあらゆる範囲に及び、地域の歯科医院も大きな被害を受けました。大災害に直面した歯科医院に何が起き、現場ではどのように対処したのでしょうか。



日本有数の漁業の町・塩竈。港から約1キロの場所に位置するこぐえ歯科クリニックは、一般歯科・口腔外科が担当の小久江知洋院長と、奥様で小児歯科担当の小久江由佳子副院長が2008年に開業した歯科医院です。歯科衛生士6名、保育士1名の充実した体制で「地域に密着した、家族みんなのかかりつけ歯科医院」を目指してきましたが、今回の大震災で津波の被害を受け、一時は周囲一帯が1メートル水没する事態に。それでもスタッフが一丸となつて約1カ月後には診療を再開させました。こぐえ歯科クリニックで伺った貴重なお話を紹介します。



3メートル以上の津波が来た場合には医院まで到達する恐れがあることは分かっていたので、すぐに患者さんを帰して、スタッフにも帰宅してもらい、私も避難しました。スタッフの皆さんも、経験したことのない揺れに恐怖を感じたと言います。

「二階の技工室で一人で作業をしていました。途中から揺れが強くなり、上から物が崩れ落ちてきて、途中で電気も消えてしまつて。宮城県沖地震がついに来たと思えました」(歯科衛生士・佐藤愛さん)。

「私は女性の患者さんのスクリーニングをしていたところで、すぐにユニットを降りてもらいました。あまりに怖くて、揺れが収まるまで2人で抱き合っていました」(歯科衛生士・千葉淳子さん)。

「私は非常勤で、その日は休みだったので自宅にいました。すぐに隣の七ヶ浜町(津波の被害が大きかったまで子供を迎えに行つたのですが、ちよつと遅かつたら危ないところでした」(歯科衛生士・石崎恵子さん)。

大津波警報がようやく解除された翌日、医院の様子を確認しにきた小久江院長の目に映つたのは水没したこぐえ歯科クリニックの姿でした。

「予想はしていましたが、実際にその状況を見た時には『これはだめだ』と思いました。3年前に土地から購

3月11日午後2時46分に起きたこと

震災直後の状況を小久江知洋院長は次のように振り返ります。

「当院は午後の診療が2時スタートなので、地震発生時は診療中で、私はまさに麻酔を打とうとしていたところでした。当時、院内にはスタッフ以外に患者さんが3人、付添の方も含めると4人がいらっしゃいました。強い揺れの後、すぐに防災無線で大津波警報が出されました。

災害時、歯科医院に求められるのは一日も早い診療の再開



宮城県塩竈市 こぐえ歯科クリニック
院長 小久江 知洋先生
副院長 小久江由佳子先生

国道45号に面したこぐえ歯科クリニック。1階が診療室、2階は技工室やキッズスペースがある。



入して建てたばかりの医院だったので、本当にショックで涙が出ました」。

翌朝、院長は再度医院を訪れます。前日は院内を直接見たわけではなかったため、覚悟を決めて内部を確認する必要があったからです。

「まだ水は引いていませんでしたが、フェンスを伝って中に入りました。すると、機械室は全部沈んでいましたが、診療室の中はかろうじて無事でした。これは何とか再開できるかもしれないと思いました」。

その話を聞いた小久江由佳子副院長は、東京在住の弟さんを通じて、こぐえ歯科クリニックのブログに次のような文章をアップしてもらいました。

必ず同じ土地で復旧できるように、全力で努めて参ります

「再開を目指すからには、何らかの情報を発信しなければ、と思いました。ブログが更新されたのを見て私たち

の無事を知った、と何人もの人に言われました」。

培ってきたチームワークが何よりの力に

院長・副院長とも、震災後に一番気がかりだったのはスタッフの安否だったと口を揃えます。

「みんな海に近い地域に住んでいますし、どの道を通って帰ったかも分からなかったので、気が気ではありませんでした。電話も携帯もなかなかつながらず、何度も携帯メールを送ってようやく一人ずつ無事が分かってく、という感じでした。千葉さんとは最後まで連絡が取れなくて、結局家まで探しに行つてやっと再会できて、『ああよかった！』と2人で泣きました」(副院長)。

全員の無事が確認できたところから、診療再開に向



震災翌日、水没した歯科医院(上)と現在の様子(下)



けた動きが始まりました。まず始めたのが、スタッフの意思確認です。

「再開を決めたといっても、正直いつになるかは分かりませんでしたし、再開後に以前のように患者さんが来てくれるかどうか読めない状況でした。それに、スタッフは全員有資格者なので、被害の少ない町に行けばすぐにも働くことができます。ですから、そういう意味での意思確認を一人ずつしました」(院長)。

それに対するスタッフの答えは、全員が「続けます」というものでした。その時の心境を伺うと、佐藤さんは「私は開業時からのスタッフなので思い入れがあつて。診療スタイルを決めることからみんな話して合つてやつてきたので、もう一度自分たちでやるんだ、という気持ちが強かつたですね」と言います。

同じく開業時からのスタッフである千葉さんは「私の家は床上浸水してしまったので、正直、自分のことでいっぱいでした。でも、私はこの医院では一番

翌々日、医院の2階から撮影したもの。付近一帯が水没した状態が約1週間続いた。





小久江 知洋 (こくえ ともひろ) 先生 プロフィール
 1999年 東北大学歯学部卒業。同大学歯学部第二口腔外科、国立仙台病院歯科口腔外科(現仙台医療センター)、みかみ歯科医院(宮城県角田市)に勤務した後、2008年に現在地にて開業。院長として一般歯科と口腔外科を担当。

小久江 由佳子 (こくえ ゆかこ) 先生 プロフィール
 塩竈市出身。2000年 東北大学歯学部卒業。同年より2008年まで同大学歯学部小児歯科に勤務。現在は副院長として小児歯科を担当。日本小児歯科学会専門医。

年上なのですがみなさんに支えられてきたと感じていますし、他で働く気は全くありませんでした」と振り返ります。また、2009年から勤務している歯科衛生士の小幡晃子さんの答えは「私も今まで通りみんなをやっていたい、という気持ちでした。一人でも欠けてしまったら嫌だな、と思っていました」というものでした。

そうしたスタッフの言葉は本当にありがたかった、と院長は言います。

『つちが開業のときから』院長・副院長についてきたというのではなく、みんなが間違えながらもいから、少しずつ作り上げていくというスタイルでやってきました。スタッフも同じことを感じてくれたことがとても嬉しかったです。

そしてここから、再開に向けた動きが本格化します。「スタッフさえ戻ってくれば、他はどのようにかなると思っていました。だからそれ以降は、再開のために何をすべ

きか、という具体的なことに集中できました。まずは患者さんの予約簿を家に持ち帰って、再開しただけで連絡が取れるように一覧表を作りました。さらに電気が来たならこれをして、水道が通たらあれをして、というマニュアルを作りました。同じものをスタッフにも配って、こういう流れで再開に向けて頑張りましょう、と説明をしました。やるべきことが明確になると、動きやすくなりましたね」。

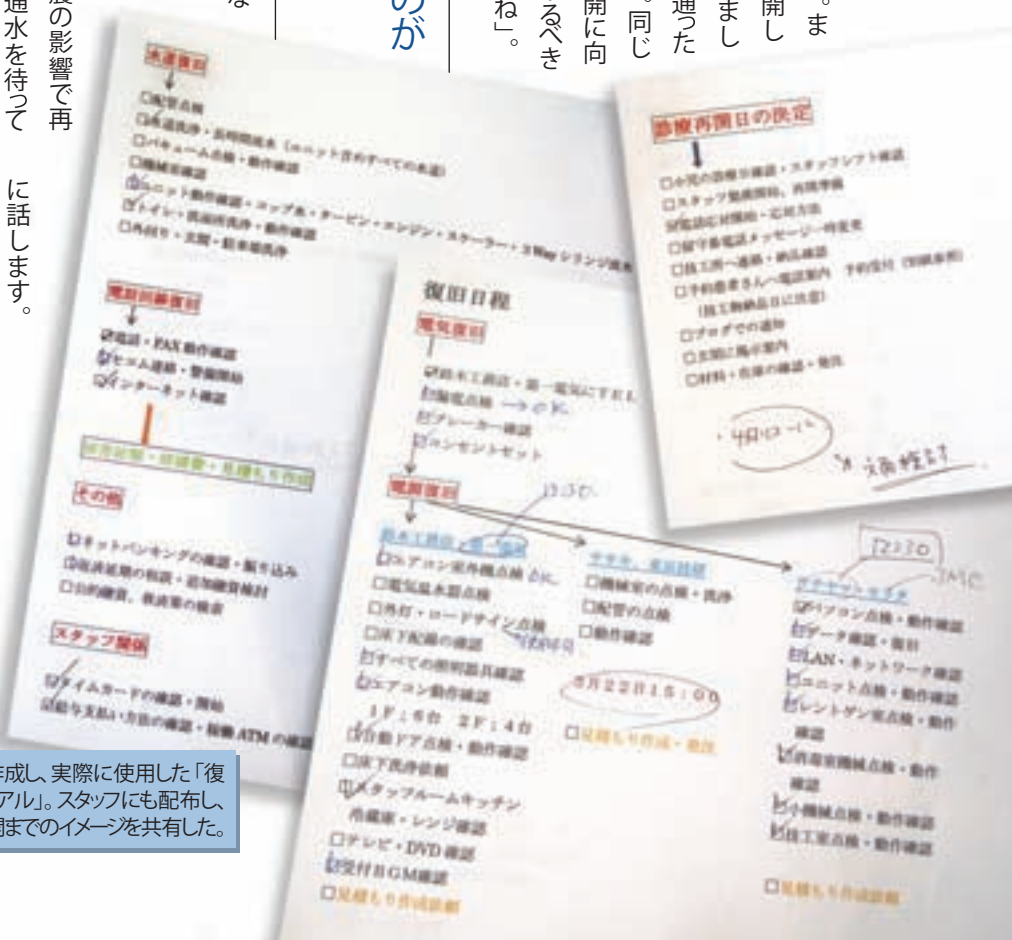
一日も早く患者を受け入れるのが 歯科医院の役割

院内の配管修理、水没した機械の交換などを経て、こぐえ歯科クリニックは3月26日に時間・内容とも限定的ながら診療を一部再開、29日には小児歯科も含めて全ての診療を再開しました。4月7日の大きな余震の影響で再び水・電気が止まってしまいましたが、11日の通水を待つて再度診療を開始、現在は震災前と変わらない通常通りの診療を行っています。

患者さんについても、一番気になっていたのは安否だったと院長は言います。

「何しろ被害が甚大だったので、患者のみなさんが無事なのかどうか、それが一番心配でした。口腔状態については、多少悪化していたとしてもそれを治すのが自分たちの役割だと思っていました。再開さえできれば、うちにはプロの歯科衛生士もいますし、充実した口腔ケアができる自信がありましたので」。

小児歯科担当の副院長は、再開後の状況を次のよう



に話します。

「5月頃からは定期検診の予約が多く入るようになります。お母さんたちも、震災後は子供の歯に良くない生活が続いていたのが心配だったようです。でも非常事態で子供にもストレスがかかっていますし、つい甘いものをあげてしまうのも仕方ないですね。むしろ歯が悪化していたり、食習慣が乱れている子供が増えていますので、これからその状態を改善していかなければと感じています」。

診療を再開して約3カ月。町の状態が次第に落ち着いてきたこともあり、リコールで来院する患者さんが多くなっていると言います。また、被災して廃業を余儀なくされた他の医院に通院していたり、被害の大きい地域

院長が作成し、実際に使用した「復旧マニュアル」。スタッフにも配布し、診療再開までのイメージを共有した。

から移ってきた新規の患者さんも多く、震災前に比べて患者数は大幅に増えているそうです。

「実際に経験してみてもよく分かったのですが、災害時の歯科医師の役割としては、可能であるならば自分の医院を再開して、患者さんを受け入れる態勢を取ることが一番だと思っています。この地域の日常を回復させる一環としても、歯科医師である自分は診療を再開させなければならぬ、という気持ちでした」（院長）。

医院の経営者として 万が一に備えて考えておくべきこと

今回の大震災で痛感したのが、災害時マニュアルの必要性だったと言います。災害時に自分の医院でどの程度の被害が想定されるのか、カルテ等のデータのバックアップはあるのか、緊急時の避難場所や安全な帰宅経路は把握できているのか、スタッフ間の連絡はどうするのかなど、万

の重要性を身にしみて感じたそうです。

さらに、緊急時には「歯科医師」というより「医院の経営者」として考えなければならぬことが山のように出てくると小久江院長は話してくれました。

「早い段階で被害総額を計算して、金策を考える必要があります。休診分も含めた損失をどう補填するか、そして何より従業員の給料をどう払っていくのか。スタッフが引き続き働いてくれることになりました、でもお給料は出せません、では責任を果たせませんから。雇用調整助成金などの制度はすぐに調べましたし、銀行にもすぐに相談に行きました。緊急時には『経営者』としての判断が非常に現実的な問題になってきます」。

最後に、今後のことについて何うと、『地域に密着した家族みんなのかかりつけ歯科医院』という目標に向けて改めて努力を続けたいという答えが返ってきました。

「まだ3年目ですし、同じスタッフで再開できるわけですから、震災があったからといって急に意識が変わるということはありません。これからもみんなで話し合いながら、理想の『こぐえ歯科クリニック』を築き上げていきたいと思えます」（院長）。



(上)主に小児歯科の診療を行う個室
(下)配管は故障したものの、ユニットはかろうじて無事だった



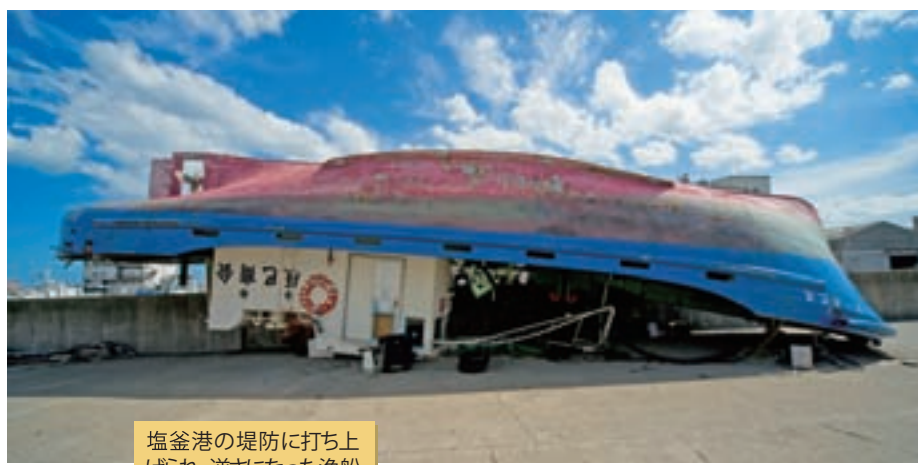
こぐえ歯科クリニックでは開業以来の恒例行事として、毎年子供たちを対象にした「夏祭り」を開催しています。ご近所のピアノ教室によるミニコンサートや、医院の建物全体を使って

のスタンプラリー、そして歯科器材を使つてのセメント練和やレジン充填ができる大好評の「体験コーナー」など、スタンプ一丸となつて取り組む「大イベント」です。この「夏祭り」を今年も開催したいと副院長は意気込んでいます。

「震災の被害で子供たちの遊び場所も少なくなっていますし、是非開催したいですね。これも『自分たちができること』の一つです。できることを一つずつ積み重ねて、これからも一生懸命頑張っていきたいと思えます」。



お話を伺った歯科衛生士のみなさん（左から）千葉 淳子さん、石崎 恵子さん、小幡 晃子さん、佐藤 愛さん



塩釜港の堤防に打ち上げられ、逆さになった漁船



止まったままの信号も所々に